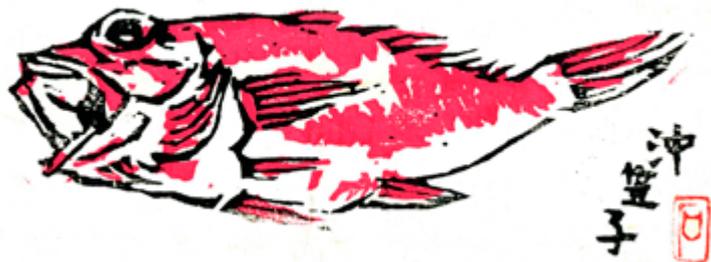


あを 7
2016





版画 武井石艸

登るまで幾たび地図を出すことか
伝説の瀧遠ければ手で話す
きつつきに霧の結び目重くなる

堀内一郎

好摩乗換霧をうたひて啄木立つ
遠く雷火口に拾ふ石冷たし
たそがれの田人へ汽笛二度鳴らす

佐藤喜孝

(昭和 39 年 7 月 水音)

あそ

七月



齊藤裕子さんをしのびつつ

東京

佐藤 喜孝

白蝶のあんなに遠いところかな
姉さんのやうな年下花みづき
六月の月に遅れてゐるあゆみ
二停留所前にバスゐる夏の雲
白鷺の影を捨てたる高みかな

東京

七郎衛門吉保

五月景

柏の葉 柏の香り 柏餅
反り浮ぶみどりのつるぎ菖蒲の湯
柱なく背丈刻めぬ節句かな
護憲の日意見広告名を標す
はしやく声保育園でも五月病



東京 篠田 純子

裕子さん逝く

お手植糸の稲の日裕子さん送る
裕子さん色の百合起きてよと言つて了った
ヒトスジシマカ口惜しいなんて言ふもんか
イカリワク怒り湧く度ビール飲む
青葉映る 百間廊下風の音

石川 定梶じょう

日雷

かと思ひさうと思ほゆ亀啼いて
谷川に倒木架かり花いばら
あくび噛みころせり母の日の父は
実在論白紙へ羽蟻落ちにたり
狛犬の耳立て尾立て日雷

埼玉 須賀 敏子

夏来る

夏草や風力発電廻る廻る
細き人太き人にも夏来る
電話では元気あるふり柚子の花
新しき友の墓訪ふ夏立つ日
夏きざす十二才のピアノ力満ち

埼玉 竹内 弘子

石

敷石に蜷蛎はらばひ喪の明くる
目高群る水に磁石をあつるごと
石をもて釘打つ音に明易き
夏草にみくじを結へり平泉
できたてのコピーがにほふ夏期講座



東京 田中 藤穂

若葉雨

目覚めては病む友おもふ若葉雨
調査員帰りし疲れ柿の花
五月来ぬ海山見たき望みあり
ひたぶるに父母恋し昭和の日
白雲木花仰ぐ樹下湿りをり

石川 中川旬寿夫

昭和の日

喪の什器人来て洗ふ桐の花
吸ひ呑みが転がつてゐるはたた神
当番が木札を吊つて昼寝中
水番が謝つてこと治めけり
釘箱の中の折り尺昭和の日

三重 長崎 桂子

五月

残る柚子ふりかける昼風光る
衣の軽く歩みも軽し五月かな
風五月町の幾多の匂ひ満つ
風撫でる花壇の五月の放物線
母の日の切花の種の大変化

東京 森 理和

腕時計

葉桜や買った時計は左手に
葱の花の帽子のボンボンにする
泥付きの筍並ぶ直売所
葺替へ中屋根に数人文化財
田植され葉先の揺るる越後かな



東京 赤座 典子

早稲田通り

西日中早稲田通りをデモ行進
夏木立シュプレヒコールのラップ調
住みし家様変りして氷菓売る
里帰り気分のままの夕薄暑
夏灯友の実家の眼鏡店

埼玉 秋川 泉

揺らぎ

薫風や若冲展に人あふれ
原発の伊予の里から夏蜜柑
家移りや忘れられたる董草
鯉のぼり今場所こそは稀勢の里
友逝けりすみだの花火咲きし日に

山梨 井上 石動

☆

いにしへゆ続く水音よ群青忌
五月雨はひかる舗道へ夜の都会
乱音の喧騒渋谷黴の路地
まつり果て諏訪の上社は青嵐
とは申せ粹に生きたし祭笛

埼玉 大日向幸江

日曜日

日曜の家族見上げる鯉のぼり
オブラードに包む胃薬麦の秋
両の手に摘み放題の赤ポピー
するすると顎が食べてるところでん
泳ぎ着く子猫ボートに助け上ぐ



東京 佐藤 恭子

春

本流も支流も本湍さくらかな
しこめ草春の雀のよりどころ
恋猫の柳条のもとまるき背
ひだり延べそつと右足恋の猫
背後から赤紙チラチラさくら散る



六月作品より

篠田純子・佐藤喜孝

をぢさんはみな遊び人 蛸蚪の紐

佐藤 喜孝

お玉杓子が、おじさんたる蛙がぴょんぴょん
跳ねている様子を、紐の中から学習しているよ
うです。「父親は自分を成してくれたのに、お
じさんはどうもいけない。」種の保存を真剣に
考えている、聡明なお玉杓子なのでしょうか。

(純子)

手首の輪ゴムひとつ貰って 梅花の花

佐藤 恭子

後で役に立つかと、輪ゴムを見かけると手首
にはめてしまいます。輪ゴムを貰うことにより、
場の背景も見えてきます。お裾分け。あたたか
くなったなどの立ち話。梅の花も効いています。
手首の輪ゴムの登場で、懐かしい昭和の匂いが

漂います。(純子)

地廻りの猫避けるそ 落椿

七郎衛門吉保

私の想像する地廻りの猫は、雄の大きいノラで
六歳くらい。毛色は茶トラでパサパサ艶無し。
獰猛さも感じますが、以前目の前に突然椿が落
ちてきて、びっくりして一メートルほど、不覚
にも飛び上がってしまったのです。爾後、落椿
には近寄りません。(純子)

あたたかし散髪どの店に行かう

定梶じょう

冬帽子で何とかしていた髪も、このところの
あたたかさで、いよいよ床屋に行かねばなりま
せん。気軽に話せる、気の利いた店主が良いで
すね。(純子)

どこまでも宮古ブルーの夏始

須賀敏子

南国の空は、他所では見ることのできない青さなのです。この句から視覚、空気、潮の香りまで伝わってきます。(純子)

花大根小火のありたる人ばかり

竹内弘子

消火もひと段落して、やや落ち着いた頃なのでしょうか。ボヤの跡を見ている人ばかりを、作者は見ています。人ばかりとは距離があるようです。花大根の色が寒色系なので、騒がしい心を落ち着かせる、ホッとする色なのです。(純子)

戦前の小説の一節のやうな雰囲気のある作品。田園の中で人間模様が織りなす物語を読む者は勝手に紡ぎ出せさう。そして結末も定かなく終はりさうな物語が浮かぶ。(喜孝)

春深し海より見上ぐ赤間宮

田中藤穂

まさに平家の沈みし海から、安徳天皇を祀る宮を、見上げています。海の底にも都はあると言われ、素直に入水する幼帝。春深しの季語が海の深さを導いてきて、哀れさを感じました。(純子)

吊革の揺れて春めく車内かな

田中藤穂

山の手線の車内を想像しました。新入学の女生徒の、新しい友人とのお喋り。と、急に車輪が揺れて、女生徒はバランスを崩して嬌声が湧きます。作者も女学生に戻ったかのように、若々しい気分になります。(純子)〔五月号より〕

榛の花第二志望に合格す

田中藤穂

榛の花は遠目には目立たぬしづかな花。第一志

望でなく第二志望に合格とのこと。勿論少しは残念と思ふ所であるのだらうが、淡淡と結果を述べてをられるところに好感の持てる作品。「第一志望」であつたらつまらぬ作品になる。(喜孝)

のめかり時」といふ季語が大嫌いであつた。句会で目の敵にしてゐた。この句から暖流先輩のことばを思ひ出した。まさにこの句は「俳句は表現だ」といふ佳い見本。

皇紀二千六百年のさくらかな

中川句寿夫

私の子供の頃の、ゴム飛びの唄を思い出しました。きんしかがやくにつぼんのアジアのひかりみにうけて……紀元は二千六百年。記念植樹のさくらが、今年も綺麗に咲いたのでしよう。(純子)

握力の左が勝るめかり時

中川句寿夫

「俳句は表現だ!」これは『暖流』の先輩の呑んだ時の口癖。肯いながらそれだけではすまないだらうなと聞いてゐた。しかし今でも耳に残つてゐる。又昔話で恐縮だが、高島茂は「蛙

初蝶や今日も着馴れた衣を洗ふ

長崎桂子

着馴れた衣類を毎日洗うという日常と、初蝶を認識した非日常(おどろき)がとても自然に纏れあつていて、しかも洗濯ものをほぐしつゝ干す仕事を、蝶がこちらの様子を見ているという印象を受けました。着馴れた衣という語彙が心に残りました。(純子)

柿若葉あんぱん買つて祖母の家

森理和

パンでありながら和菓子の餡が入っているあんぱん。思えば不思議な食品で、そして女子に根強く支持されています。「ばば喜ぶかな?」

柿若葉の季語に、幼児の愛情が現れています。

(純子)

復活祭礼拝堂にジャズを聴く

山 莊 慶 子

おしゃれです。スイングして、身も心も軽くなりそうです。本堂で落語会という句を、見た事がありますが、どちらも信者さん、檀家さんにサービスする時勢なのでしょうか。(純子)

新緑やもっこり柔らか里の山

渡 辺 京 子

新緑の頃私も、土がふわふわしていると感じた経験があります。地中のバクテリアが活動しているのかと思っています。もっこりの表現が、温かさを感じ好きでした。(純子)

春の風幼の旋毛大きかり

赤 座 典 子

幼児の頭は、体に対して大き目です。綺麗に

山神へ願ふ木遣ぞおん柱

井 上 石 動

テレビで今年の御柱の木落としを見ました。江戸町火消の木遣とは、雰囲気の違い木遣の後、エイ、エイ、エイ、と叫び、進軍ラッパが鳴り響きます。それを合図に木も人も落ちて行き、物凄いエネルギーを感じました。(純子)

そわそわと孫名乗る男四月尽

大 日 向 幸 江

詐欺師は我家にお金の無い事まで調べているようで、一回もオレオレ詐欺の電話がきません。作者宅にかかってきた電話では、被害は無かったのでしょうか。ちなみに私は八歳の孫とLINEを始めました。(まだ使いこなせていません)(純子)

渦を巻いている旋毛を見ている作者は、健やかに聡明であれと願いつつ、幸福感一杯なのです。

(純子)

落花霏々バス停めざす肩車

赤 座 典 子

幸せな光景である。遊びに来た孫を肩車に乗せバス停まで送ってゆく姿が浮かぶ。時は春、降りつぐ落花の中をゆくのである。「めざす」の語に勢いがある。孫から元気を貰ったのであらう。(喜孝)

トンネルの向ふに続く蝮蛇草

秋 川 泉

さほど長さの無いトンネルのこちらにも、抜けたあちらにも蝮蛇草が自生しています。怖そうな名前ですが調べたところ、葉草との事でした。ひんやりと湿った隧道の空気を感じました。

(純子)

毎月25日発売 定価1200円(税込) 月刊**俳句界** 2016年8月号

〈特集〉終戦日特集
無言館を訪ねる
～若き兵士たちが祖国日本を遺した遺言～
○無言館ギャラリー
○インタビュー 窪島誠一郎(無言館館長)
○無言館を詠む
佐藤文子 古田紀一 原霞

あなたの俳句切れます?
～上手な切れの使い方～
○「切れ」についての Q&A・名言
○切れ字の名句30句
○切れ字の使い方
河内静魚 長嶺千晶 山根真矢 鹿又英一

ラッセ **俳句界NOW** 佐怒賀直美
特別作品50句 大牧 広 高橋睦郎
21句 落合水尾 兩宮抱星 古賀しづれ
※セレクション社「円虹」山田佳乃

私の一冊 堀本裕樹「いるか句会」
対談 佐高信の甘口でコンニチハ!
谷口真由美(社会運動家)

別冊 **投稿俳句界** 一流選者29名!
日本一充実の投稿欄

※一部変更の可能性あります。
株式会社**文學の森** お求めは... ●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

日本からつるりと剥ける地球かな	佐藤喜孝
鶉のさくらの奥に入りしまま	佐藤恭子
芽吹き待つ雑木山肌ココア色	七郎衛門吉保
白雲木の花いや高くそよぎけり	篠田純子
炬燵しまへば潮さみに耳敏し	定梶じょう
清明の空を南へ宮古島	須賀敏子
花大根小火のありたる人ばかり	竹内弘子
榛の花第二志望に合格す	田中藤穂
握力の左が勝るめかり時	中川句寿夫



初蝶や今日も着慣れた衣を洗ふ	長崎桂子
桃色の日射しを浴びる桃源郷	森理和
気がつけば鉢植葱に葱坊主	山莊慶子
日輪の月のごとくに春闌けし	渡辺京子
落花霏々バス停めざす肩車	赤座典子
トンネルの向ふに続く蝮蛇草	秋川泉
巖よりずれたる注連や青嵐	井上石動
菊の香にむせてしまひぬ通夜の席	大日向幸江



比来披見

ホトトギス 六月号	稲畑 汀子
でで虫を見かけ平和と思ひけり	稲畑 廣太郎
優曇華や山莊朽ちてゆくばかり	能村 研三
沖 六月号	大橋 昶
のどかなり常着のままの遠吟歩	高橋 将夫
雨月 六月号	徳田千鶴子
誰彼の面差し偲ぶ彼岸かな	神蔵 器
槐 六月号	鈴鹿 呂仁
異次元はこんなところよ春の闇	山田 六甲
馬酔木 六月号	井上 信子
正解はひとつでなくて亀の鳴く	
風土 六月号	
電打つて平らな水の沸騰す	
京鹿子 六月号	
深緑に溶けて人無き脇参道	
六花 六月号	
沐浴の雀よ余花の雨あがり	
鳴 六月号	
恋猫のうしろ向きたる草の揺れ	



島青く海またあをくただ霞む	高橋 道子
万象 六月号	大坪 景章
底抜けの青空に浮く紅椿	安立 公彦
春燈 六月号	小川 玉泉
梅一輪茶毘のけむりを仰ぐかに	松本三千夫
末黒野 六月号	朝妻 力
瑞香へ運ぶ卒寿の杖の先	
雲の峰 六月号	
供へたる新茶が小き湯気を立つ	
萱 六月号	
風船を逃せし吾子の暮れ遅し	木村 嘉男
近づいて来て遠ざかる雀蜂	亀田虎童子
夕方の雨脚となり春一忌	小島 良子
朝 六月号	岡本 眸
十葉のまつすぐな目に見詰らる	
こだま 五月号	
支へ合ふ日々に明暗新茶汲む	松林 尚志

(喜孝抄)

半夏生

夏至から十一日。半夏といふ毒草の生ずるところといふ意。「半夏雨」「半夏生ず」とも用ゐる。扱ひにくい反面扱ひやすい季語。

肩に触る柳おもたき半夏生	後藤 志つ
半夏生己の手足生臭し	田中 藤穂
あいさつの姿よき人半夏生	鎌倉喜久恵
半夏生背中合せは顔見へず	東 亜 未
繰りごとは病ひのひとつ半夏生	堀内 一郎
本人は病人でなし半夏生	佐藤 喜孝
脈拍が水枕打つ半夏生	齊藤 裕子
虚子庵に句会あるらし半夏生	赤座 典子
二言三言交わす付き合ひ半夏生	篠田 純子
藤穂句の生身の人間と半夏生。	典子句の俳
句に心ある人の虚子庵へのおもひ。	それぞれ
おもしろい。	

七月の季語

葉の一部分が白く変化し、草音痴のわたしにも見分けやすい草。三白草・半夏生・はんげしょう草とある。時候の半夏生と句によつて読み分けることもある季語である。

片白草

夕暮の片白草に立ちどまる	須賀 敏子
ためらひつつ片白草を手に掛ける	篠田 純子
半夏生草荒地の残る寺の奥	田中 藤穂
染分けは神のいたずら半夏草	森山のりこ



(喜孝記)

俳境流連

お住持の今もふんどしで烏雲に

じょう

「ら抜きことば」が日本語の乱れとして指斥されるようになって久しい。最近では「話しことば」として凡そ認められてきているようですが、「書きことば」としては今でも少数派のようです。しかしそれも時間の問題、と指摘する識者が多い。

近頃では、「れタス」「さいレ」という言葉もあって、「咲ける」を「咲かれる」「読める」を「読まれる」など、あるいは「歌わせて頂きます」を「歌わさせて…」や「帰らさせて…」などと、不要の「れ」や「さ」を付け加えるわけです。

掲句の「お住持」。永らく地元公民館の館長を

つとめて、先年亡くなりましたが、その方と一緒に

の時に、NHKラジオで或る演歌の女性歌手がアナウンサーと対談。「やはりステージではお着もの姿が多いんでしょうね」という質問に、「そうですね、お着ものを着させて頂くことが殆んどですけど、おうちに帰るとパンタロンなんかも着させて頂きます」と言ったのでした。すかさずその住職が、「アンタさんがパンタロンを付けようがスポンポンで街ん中を走ろうが、誰のおかげでもない、アンタの勝手や」と仰有ったのでした。

庫裡うらに越中ふんどしが干されてあるのを知っていた私は、その言を随分おもしろく感じたのでした。

鈍^{なまくら}を自負としけふも早起きし

恭子

会社に勤めている頃から自分の起きる時間は決めている。茅場町まで行く最小の時間を計った。日本の交通機関はものすごく几帳面だ。1分でも遅れるとすぐ車内放送がお知らせをする。東京駅から都電で茅馬町まで行っていたが、地下鉄が出ると、荻窪まで行く地下鉄に乗り換えて茅場町へ。あの頃は今と違っていいのかよくわからなかったが、車内で本を読んだりしている人は少なかった。というよりいなかったように思う。今でもそうだが、用が無ければ早起きはしない。三年前までは5時半に起きてお弁当を作ったりしたが、今はそれもしなくて良くなったので、起きていても7時半にならないと布団から出ない。その時その時に合わせ自分で加減をしている。早起きは三文の徳とはよく分からない私には？自分に合った毎日が送れている今日この頃……。まあいいか！

柚子風呂に思考全く消費てる

桂子

わたしはゆずがだいすきです。秋も深まり柚子が店頭に並ぶ頃になると、つい買ってしまいます。お味噌汁、吸い物、さらだ、焼魚など、それと飲み物にもいろいろと使用し食しています。冬至には湯船に浮かべるとお湯の温かさで風呂場は、柚子の香りがいっぱい立ち込めます。そんなお風呂のドアを開けると香りにうっとりとなり、湯船に体を沈めれば昼間の疲れを忘れさせてくれます。至福の時です。



今年

庭梅の咲きて今年も兄に会ふ
友と観る今年の牡丹眼にきざむ
今年もねべランダからの初の富士
傘寿です今年限りと年賀状
雛の箱今年も柵に置きしまま
牡丹や今年も花芽二つ三つ
今年又一つ減らして年用意

言霊

五更時石に言霊松落葉

言伝

言伝では東風よりやさしとどきもの

言問

待ち合す言問橋や梅雨の傘
いにしへの高尾もみぢや言問はん
言問はむ鳥みぢ冬の川流る
冬日和言問通り谷中坂
緑蔭に言問団子スカイツリー
言問ふて春の草ほどまぶしかり
秋草や殊にこのみの糸すすき
白樺の殊に目立ちぬ秋没日

芝宮須磨子
森山のりこ
須賀 敏子
赤座 典子
鎌倉喜久恵
早崎 泰江
須賀 敏子
東 亜 未

吉弘 恭子
関口 ゆき
河合 笑子
田中 藤穂
藤野 寿子
森 理和
佐藤 恭子
木村茂登子
井上 石動

言の葉

逃水や言の葉を追ふあそびせり
野遊びの言の葉あまたすてきし
言の葉を紡ぐわらべに秋日和
出しおくれの言の葉悔いし凌霄花
言の葉に力を貰ひ夏迎ふ

言葉

滝に来て次次つぎつぎ言葉のむ
離婚てふ言葉たやすし夏の末
湯たんぽに増す看護婦の褒め言葉
川船へ蝶は言葉のやうに降る
春北風優しい言葉探して
むくげ咲く生きる証に言葉吐き
合歓の花言葉通わぬほうがいい
冬桜言葉選みたる文送る
日めくりの聖の言葉木の葉降る
賀状書く少しの言葉心込め
何気なき言葉の棘や破芭蕉
ロボットと交す言葉よ九月尽
萩伐つて言葉少なき朝ゆふべ
指先に言葉の溜るさくらんぼ
春愁てふ言葉を知らぬ頃のこと

早崎 泰江
森 理和
芝宮須磨子
佐藤 恭子
齊藤 裕子
東 亜 未
後藤 志つ
松本 米子
渡邊 友七
須賀 敏子
関口 ゆき
森 理和
齊藤 裕子
田中 藤穂
須賀 敏子
早崎 泰江
森山のりこ
田中 藤穂
堀内 一郎
赤座 典子



齊藤裕子さんがお亡くなりになりましたという。恭子さんのおハガキで知りました。何ともいたましい。句を通して御病気であることは知ってましたし、此の五月号の巻末作品では、相当お悪いのかも、と案じてはおりました。

今はただ安らかな眠りをお祷りたい。

予約する緩和病棟初桜 裕子

黒澤佳子

根津つつじいこいの石や鴉外も
都電沿い二駅つづく薔薇や薔薇
マリアカラス深紅の薔薇や際立てり
ラッキョ剥く夫は吾より丁寧

二十個の大蒜剥く手じんじんと

根津つつじいこいの石や鴉外も

私の長兄がかつて、千駄木にある医科大学を卒業して付属病院に勤務していたことがあって、根津権現にはやや知識があるのですが、兄夫婦のもとへ行つたのがいずれも「つつじ」の花の頃ではなかった。花の記憶がないのです。鴉外旧居も行かなかつた。多分千駄木へは小遣いを貰うのを目的に。勿論「いこいの石」も知らないわけですけど、坐五「鴉外も」に作者の思いがこもっているのです。

都電沿ひ二駅つづく薔薇や薔薇

坐五「薔薇や薔薇」がうまい。

マリアカラス深紅の薔薇や際立てり

「薔薇の深紅や」とした方がより際立つと思つています。

ラッキョ剥く夫は吾より丁寧

「丁寧」は、授業風にいえば「丁寧なり」の連用止め、ということになります。説明臭が出てきます。

吾よりも夫が丁寧ラッキョ剥く

二十個の大蒜剥く手じんじんと

「二十個の」は実数なんでしょうけど、囚われる必要がないと思うのです。

二十個も大蒜剥くや手がじんじん

赤座典子

老鶯に明日の遠出を促さる

西海道地震止まぬまま夏に入る

早苗植う山懐の二人かな

やはらかき菖蒲の湯より句の浮ぶ

老鶯に明日の遠出を促さる

たびたび申しあげてますが、窮屈にならぬ限り助

動詞は省きたい。

老鶯に明日の遠出促さる

但し、「明日の遠出を」としたい、ということならそれまた結構。私の直しようはその程度のもの、

と違って頂きたく。

西海道地震止まぬまま夏に入る

俳句はどこかに省略を欲する文芸の筈。「地震止まぬまま夏に入る」は散文の言いよう。

西海道地震が止まぬ夏に入る

「止まぬ」は「止まないけれど」の文語的表現です。

やはらかき菖蒲の湯より句の浮ぶ

「菖蒲の湯より」が曖昧、と思います。

やはらかき菖蒲湯にをり句の浮ぶ

山莊慶子

五月来る鳥の凶鑑のプレゼント

担任の家庭訪問五月かな

麦の秋児のつくり初む俳句かな

水草の花咲く家や車椅子

空家めき牡丹荷葉咲き継ぐる

麦の秋児のつくり初む俳句かな

「つくり初むる」が真正な言い方。高名な俳人で

も「俳句では許される言いよう」と言うことがあって、どうして誤った言い方が「俳句では許される」のか理解できない。俳句も文芸です、だからこそ正しく遣うべき、と仰有るのが当然のはず。慶子さんのお句もいい取り合わせをしているわけですから、「児のつくり初むる」と字余りにするか、

麦の秋児の書き初むる俳句かな
のように定型にすべき。

空家めき牡丹荷葉咲き継ぐる

「継ぐる」の形は此の動詞にありません。「継がず・継ぎて・継ぐ時」と変化しますが、「継ぐる」は出てこない。そして、牡丹と芍薬を一句中に並べると、普通はご法度ではありませんが、この句では違和感がない。ひとえに「空家めき」が利いているかなのです。花が豪華絢爛であればあるほど「空家めく」の措辞が句を際立たせる。

空家めく牡丹芍薬咲き継いで

花に詳しい知人に聞いたところ、牡丹の方が芍薬

より若干早く開くそうで、「牡丹芍薬」の順番通りということ。

森直子

珈琲を濃い目に淹れて今朝の夏

初夏の木々揺れ止まず照り止まず

本屋さん無くなりし町夏うぐひす

鼻長きバスに酔ひしも青田道

葱坊主鼻たれ小僧消えし村

珈琲を濃い目に淹れて今朝の夏

俳人の常識からいえば、この場合の季語は「今朝の秋」か冬にしたくなる。それが「今朝の夏」と。ほんの少しの意外さがこの句を成り立たせている。俳句とはそうしたもののなのです。

葱坊主鼻たれ小僧消えし村

「消えし村」が言いたいのでしょうか。

葱坊主鼻たれ小僧みなくなり

田中藤穂

さりげなく手を添へらるる青葉道
三社祭浅草の友病みしまま
更生へ望みをつなぐ朴の花
赤ん坊の泣く声茱萸は実の熟れて
戦火経し一茶の句碑にすみれ咲く

三社祭浅草の友病みしまま

折角のお祭なのに、その浅草の友人は病んだまま
である、と。散文を五七五に移しかえると掲句にな
るわけで、省略や飛躍がないために緩くなるのです。
「友病みしまま」と言ったがために「三社祭」に掛かっ
てゆく。

浅草に病みし友あり三社祭

切れとか休止とかが俳句には必ずあるべき。

更生へ望みをつなぐ朴の花

「更生」よりも「回復」あるいは「平復」とした方が。

赤ん坊の泣く声茱萸は実の熟れて

解しましたが、暗いうちでも一向かまわない。街燈
があります。「濃あじさぬ」だからこそダイアのひ
とつぶのように雨水をいだいていた、と。

須賀敏子

届きたるアスバラガスの濃き緑
峡ふかく車入り行く山つつじ
貸し農園ぴんと立ちたる蒔の苗
扇風機出すや五月の終わる日に

扇風機出すや五月の終わる日に

口語調の句。それを狙ったんだということなら良
しとしますが、どうせなら
扇風機 五月 尽日 置いてある
のようにしたい。

大日向幸江

命日や母に捧げるカーネーション
湖の沸き立つやうな大夕立
紫陽花の七色の夢咲かせけり

「茱萸の実は熟れて」の方が自然。

佐藤恭子

人縫って浅草寺へと雀の子
恋猫のピー玉追ふてころがりて
夜あがりの粒をいだきし濃あじさぬ
あじさぬや苔でいいぞ急くなせくな

人縫って浅草寺へと雀の子

「浅草寺へと雀の子」とあります。あの雑踏を子
雀が？それとも、上句と坐五の間に切れがあつてお
寺へ向かうのは作者であり雀の子は近辺の屋根なん
ぞに居た？。今ひとつ分かりづらい景なのですが、

人縫って浅草寺さまへ雀の子

とあればほんの少し分かりよくなる？

夜あがりの粒をいだきし濃あじさぬ

「夜あがりの粒」がうまい。明けがた、と私は理

野原いっばいポピーの女性合唱団

湖の沸き立つやうな大夕立
大きな景を上手にとらえた、大きな柄の句。
野原いっばいポピーの女性合唱団
そんなコーラス・グループの指揮棒をふってみた
い。

秋川 泉

桜草歩をゆるめたる母を待つ
夕星やひとりとはかどる草むしり
荷を解いて故郷の若布かほりたる
すかんぼや下校の列に折られたり

夕星やひとりとはかどる草むしり

「ひとりとは気が合う」と言います。だから草とり
も捗るわけ。捗っているながら「夕星」が出ているの
が面白い。

荷を解いて故郷の若布かほりたる
散文の語序で書かれています。

ふるさとの荷を解く若布かほりけり

すかんぼや下校の列に折られたり

列の何人かは皮を裂いて食べる筈。

森 理和

燕の巣ずらりと並ぶ道の駅
切り岸の漕の水面は深緑
野も山も流れも緑深呼吸
電柱と送電線と麦の秋

燕の巣ずらりと並ぶ道の駅

詩歌川柳の方々に言わせると、十七文字の中かな
らず決まったことば「季語」を必要とするのが俳
句。積極的に考えなければならぬ語彙は数語にすぎ
ぬ」と。確かに。そしてその上に成句慣用句を用い

「たら作者自身の案じたことばはないことになる。

掲句「ずらりと並ぶ」がそれでしよう。最低「ず
らりと」を活かすか「並ぶ」を活かすか。

燕の巣ずらりと道の駅の軒

野も山も流れも緑深呼吸

「野も山も」が慣用。

丘も野も流れも緑深呼吸

電柱と送電線と麦の秋

いわゆるコンクリート柱でも送電は行なわれるわ
けですけど、送電線といったらやはり鉄塔。

鉄塔と送電線と麦の秋

広い麦畑の上の送電線。遙かに鉄塔。壮大な景で
す。

七郎衛門吉保

万緑やみどり黄みどり深みどり

万緑の一本一本や顔の有り
遠き嶺植田に映ゆる白馬山
釣糸と浮きの随に蜃気楼

万緑の一本一本や顔の有り

無論中七の字余は吉保さん承知で遣っているわけ
ですが、読み慣れると自身が抵抗なく読めるので良
しとしてしまいます。が、初めて目にした人は大概
抵抗を感じるものなのです。

万緑の一本一本顔の有り

遠き嶺植田に映ゆる白馬山

植田に映える遠き嶺、それは白馬山である、と。
でも、田に映えるのは嶺が遠いからである、とした
方が面白い。

嶺遠み植田に映ゆる白馬山

釣糸と浮きの随に蜃気楼

うまい句。釣り人の無心のさまが「まにまに」の
語にこめられている。あたかも糸と浮きが蜃気楼を
操っているような。

長崎桂子

三つ四つ余花の細道風の渦
桜しべ隅に積もるや常となり
夏めくや白黒の傘闊歩する
寄せ植の土手の繚乱夏あさし

桜しべ隅に積もるや常となり

桜しべのふることが平常のごとくになった、とい
うことでしょうか。でも「常となり」があいまい。

寄せ植の土手の繚乱夏あさし

草花に「繚乱」の語は凡に過ぎる、としがちです
が、桂子さん、植物の名を上げかかった。それが凡
を越えた。そして「夏あさし」とあって、はて初夏
に繚乱とさきみだれる花は？と考えさせる。言い過
ぎているように言いすぎている。

中川句寿夫

足洗ひたらひに日付昭和の日
バードウィーク預かってゐる長梯子
海へゆく山へゆく靴夏立ちぬ
釘箱の中も探して梅雨に入る

バードウィーク預かってゐる長梯子

今はアルミ製の脚立はしごが主流ですが、むかしは木製の百姓家の大屋根へ届く梯子、ともかく長かったのです。今が愛鳥週間と気付いて、そうだ預かっていたんだ、と。

海へゆく山へゆく靴夏立ちぬ

海へゆく靴、山へゆく靴。それをまとめてさらに二つに分け、

「海へゆく山へゆく靴」、と。ベテランの味。いよいよ立夏なのです。

釘箱の中も探して梅雨に入る

何を探したかを言っていないのです。読み手にま

かせている。飴山實に

夕顔の種釘箱から出してくる

があつて、意外のものが釘箱にあるわけですが、句寿夫さんは具体的にものを言わないことで句を面白くした。

佐藤喜孝

をばさんは揃って美人冷し酒
汚染地の稲子のはづむ安心し
遺りたる石垣と坂春の暮
きりぎしに触れほろほると春の果
乾鮭に大きな涛のかむさり来

をばさんは揃って美人冷し酒

大阪のおばさんなら「なにてんごう言うとの」と。でも東京なら「私もそう思う」と言うかも。おばさん達は冷酒がともかく好きなのです。

遺りたる石垣と坂春の暮

喜孝さんは、こういう付け方がほんとうにうまい。

城あともあるのでしようが、「春の暮」、付け易そうで難しい。考え過ぎれば張りきり過ぎた季語になるでしょうし油断すればたべたべたに付いた季語になってしまう。仮に「秋の暮れ」と据えてみて下さい。「遺りたる」石垣と坂、ですから全く付き過ぎになってしまふ。付かず離れず、は実に難しい。

きりぎしに触れほろほると春の果

この「春の果」もそうです。

乾鮭に大きな涛のかむさり来

どんな歳時記に、近年乾鮭は作られない、あるいはそれに近いようなことが書いてあります。そんなことはありません。一般の店頭に出回らないからそういわれるのでしょうか。あんなおいしいものはない、と私なぞ思うのですが、そんな乾鮭。口を阿とあけて天をにらむ姿は奇怪かつ無気味。その乾鮭に波濤が押しよせてきたら。そうです、乾鮭は流涙して歓喜するに相違あかません。好んで乾鮭になったわけではないのですから。回帰生還して泳ぎ去る、とま

では喜孝さん仰有っていませんが、きつとぞうなるにちがいない。



齊藤裕子さんをしのぶ



2014年5月13 中野・傳にて

赤座 典子

裕子さんの句の中では「外出を匂はせてあ
る鯰大根」というの句が一番に浮かんできま
す。大根を煮ていたらご主人に出かけるのか
と聞かれてしまったと。コーラスの練習に行
かれる前のことだったのでしようか。このよ
うにほほえましい日常を様々に読まれ、句会
では大いに楽しませていただきました。

また、「あを」作品欄下段には、幼少期を
過ごされた鹿児島時代の出来事が、素晴らし
い記憶力で描かれていて、とても面白い文章
でした。

昨年は句会で隣り合わせになることが多
く、コーラスの練習を再開したこと、通院の
つもりだったのに即入院と言われ泣いて抗議

したこと等、一緒に喜んだり憤慨したりと、
色々の会話が思い出されます

二〇一五年の一年間の、驚異的なエネル
ジーでの作品鑑賞は、肩肘を張ることもなく、
まさしく裕子さんの人柄そのままに、自然体
の温かい作品評も記憶に残ります。

昨年から 傳句会に参加した夫も忽ち裕子
さんのファンになりました。早すぎるお別れ
を、二人で残念がつております。

香迎れば又あへますか沈丁花 典子
大夕焼夫・花・猫に抱かれあて 吉保

秋川 泉

裕子様

今もまだ私は、おやさしい笑顔ばかりが心に残り裕子様がこの世界から消えていらつしやらないと云う事が信じられずにおります。

「あを」の句会で、お目にかかるたび季節の美しいファッションが素敵でした。そして、ご息からのプレゼントの赤い傘をとでも喜んでいらしたことが忘れられません。コピーを取りに行く道をご一緒できて、嬉しく思っております。

天女のように、空にのぼってしまわれたのですね、お祈り申し上げます。

いろいろお世話になり、ありがとうございます存じま

た。たおやかでお美しい裕子様ご冥福をお祈り申し上げます。合掌

平成二十八年六月十八日

梅雨空に映えて広がる赤き傘 泉

「プレゼントなの」はにかおあなたのこと赤き傘

「素敵ね」とコピー行く道額の花

「猫の子が」「それじゃまたね」とほほゑみて

君逝きし病葉の舞ふ昼下り



黒沢佳子

このたびの突然の事に言葉が出て参りません。

あをに入会致しまして、美しく笑顔の絶えない優しい方だと印象がありました。

裕子さん！

一年足らずの句会でしたが、楽しい一時でした事に感謝いたします。句会の帰りに一緒にできた事が、今でも、心に残っております。ありがとうございます。

裕子さんの笑顔ばかりや半夏生 佳子

空席の句会の華や梅雨の入り

佐藤恭子

がま池の落葉もいちど裕子と行こつ 恭子

二〇一三年十一月号に発表した句である。

確か裕子さんと純子さんが計画して下さった吟行で、出来た句である。あの時は裕子さんからご病氣のことを聞いて直後だった。

がま池のビルに囲まれながらの静かな様子は作句するにはこの上もなくいい所であった。池のところどころに枯葉が舞い散り、風の吹くまま身を委ねていた。この吟行を設定して下さった裕子さんともう一度この落葉を見たいと……。落葉散る中に身を任せ、時間の過ぎ去る事も気にせず何時迄も居られたらとその時思った。この句の「行こつ」と表記した「つ」は行こうという言葉の最後に私と

しては、思いつきり力を込めて叫んでいるつもりだった。

自転車に乗って颯爽とした裕子さんの後姿は今でも頭に焼きついている。

がま池の落葉裕子にとどけ舞へ 恭子
舞ひ下りし落葉と共に我もまた

今年の初句会が裕子さんとお会いする最後になってしまった。その日私調子の悪そうな様子だったようで、(自分では全然気が付かず)次の日ファックスに心配の言葉が記されてあった。その際、久しぶりに料理が美味しかったと追記されてあった。体調を燻にも出さず優しさがこぼるるばかりの心遣いに、感無量でした。もうお会いできませんが、いつ

までもいつまでも心の中に。
ありがとう！裕子さん。



篠田純子

出会いは十四年程前で、東京電力の勉強会に参加したときのことです。私は中央区から、裕子さんは港区からで、他は品川、大田区の方も来られていたようです。五十音順で席が決っていて、何時も隣で、歳も近くて、自然と話すようになりました。

時には日帰りの、電力施設を見学するバスツアーもあり、その折も席は隣同士でした。ある時私が指を折って俳句を作っていますと、「何時も指を折っているけど、何をしているの?」と裕子さんは尋ねましたので、俳句のことを話しました。「嫌な事も、面白い事も、俳句にして思いをぶつけるとスッキリ

するの。俳句を始めてから、イライラしなくなったのよ。」と。

俳句を始めた裕子さんは、とても真面目に熱心に取り組まれ、私の想像を超えていました。あをの先生、奥様、会員の皆様ともうち解けて、句会、吟行とご一緒いたしました。字がお上手で、熱心に清記されている姿は今も目に残っています。

五月号の裕子さんの特別作品は、壮絶で感動しました。五月十六日に葉書で、六月号に評を書くから、楽しみにしていてね、と書きましたところ、五月十八日にご家族の方からメールで、「六月まででは間に合わない」と、本人が今すぐ評をメールで送って欲しい。」と言っていますとの事。その日のうちに、先生が評を書いて下さり、私の評と合わせて裕

子さん宅にメールして下さいました。五月十九日午前零時にご家族から、ご本人が評をとっても喜んでいきますとのメールをいただきました。

私ばかり何時も喋って、裕子さんは、ここにこしながら聞いて下さいました。もっと話を聞いてあげれば良かった。苦しかったこと、痛かったこと、怖かったこと、沢山あったことでしょう。でも、弱音を吐かない、裕子さんの強い生き様、素敵でした。合掌。



田中藤穂

五月二十三日の朝、新聞をとりに出たら水鉢にピンクの睡蓮が一つさいていた。蕾のあるのに気付いていなかったので突然の気がして、とても美しく思った。

裕子さんの訃報が入ったのはそれからちよつと後だった。裕子さんは昨日、二十三日のあの睡蓮が咲いた日に亡くなられたのだ。

“あを”の五月号で裕子さんは「春の日に十一句「緩和病棟入院・花の路」二十二句を出され、胸の痛む思いで拝読した。

あれは二月の二十九日、今年は閏年で二十九があった。とても有難い偶然でその日、裕子さんがお電話をくださった。少し咳

須賀敏子

裕子さんは「あを」2015年2月号より2016年1月号迄、鑑賞を担当して下さいました。毎号裕子さんの文章が楽しみでした。病気の再発の中での作句と鑑賞に頭が下がりました。句や文の中で鹿児島での生い立ち、ご両親のことなどから、優しいお人柄はその頃に培われたのでしょうか。

お元気でしたら沢山の句で、私達を感動させて下さったのにと思うと、御逝去が残念でたまりません。心より御冥福をお祈りします。

カフェ傳のいつもの席や青葡萄

敏子

が出て苦しそうだったがいつもの裕子さんの声だった。その時仰つたのは「癌の治療はとても苦しくて、自分も辛いし、主人や子供にも苦しい苦しいと辛い顔ばかり見せることになるし……」「そうですわね、それはとても大変なことだと思っけど、貴方がそう望んで、望んだようにして上げたということ、ご主人やお子さんにすれば、とても大きな安らぎになるかと思えますけどねえ。」「そうですわね。」「母がね……」と言いかけた時、看護士さんでも入ってきたのかな「あ、わわね。」とお電話が切れたのだ。それが私の聞いた裕子さんの最後の声となった。

今年の新年句会の時裕子さんは出席されて、私の“お迎へは明日かもしれぬ鮫鱈鍋”の句に天賞をくださった。私はもうすぐ九十

歳なのだから何時お迎えがきても少しもかまわないが、それまでに出来るだけ美味しいものでも食べて楽しいことをしておこう、というふざけた句だったのに、裕子さんはそれが明るくて面白いと言ってくださって、朝顔の柄の手拭とピンク色の猫のデザインのついたティッシュ入れをくださった。「朝顔は今の季節じゃないけれど、これが一番きれいだったから。」とのことだった。その時の句会でも、裕子さんはコピーをとりに行ったり、ケーキを配ったり働いてくださった。裕子さんの書く字はとても美しくて裕子さんに書かれるとどんな俳句も立派なよい句に見える程だった。御病状が徐々に重くなられていたのは感じていたものの、まさか、まさかこんなに早く、あの世に旅立たれてしまうなん

て………あをの人達はみんな裕子さんのことを心配し元気になる事を祈っていたのだ。

ご家族の方々、また鹿児島のご高齢のお母様にお慰めの言葉も見付かりません。でも、「あを」によって出逢い、俳句を通してとても楽しい深い時間を御一緒にできたということに今はただ感謝したいと思います。

戴いた朝顔の手拭とティッシュ入れはお形見として大事にいたします。裕子さん、あなたはきつと何時までも私の心の中からいなくなることはないと思います。

本当に本当にありがとうございます。

平成二十八年五月三十日

わが道はわれが選ぶと花菱

藤穂

笑顔のみ残して消えぬ夏衣
大声に泣かば癒ゆるや釣忍
母の吹く麦笛きかば還りこよ
馥郁と香りて朴の花散れり

優しい裕子さん。

笑顔の美しい裕子さん。

ここにこと話し始める裕子さん。

麻布の吟行会の折には遅刻魔の私をホームまで迎えてきて下さった裕子さん。がま池を見下ろすフェンスから夾竹桃の花が枝を伸ばす様子のもとても似た句を作り、軟化の進む私には区別が出来ずに裕子さんと笑ってしまつた事。縁日の綿あめの様に『あを』にはなくてはならない裕子さん。

緩和病棟夫と静かな花のとき

裕子

口結び息子の涙花の日に

穏やかな時今少し欲し桜前線

胸の詰まる句の数々。

真綿の様な裕子さんありがとう。

梔子の花の様な裕子さんありがとう。



あとがき

○参議院選挙の翌日にこの文章を書いておます。選挙権を得て初めての投票は勇んでいったのですが、なにも代わりませんでした。当たり前のことですが、それが解るのに半世紀もかかってしまいました。つまり死ぬことを思ってたたら永六輔氏がの逝去のニュースが飛び込んできた。

改憲党が万歳してゐる裏でこのニュースのタイミングに驚く。音を立てて世の中が変わりつつある。そして同い年の「ザ・ピーナッツ」の伊藤ユミさんも亡くなられてゐたと知る。

○『あを』を初めて十余年になりますが、その間、何人の方とお別れしたことでせう。送るたびに私の体のどこかが重くなる気がする。俳誌の主宰者は私の比ではない。さぞやと思はれる。

○悲しいことばかりではない。孫が卒園式のDVDをみた。マリア様をやる人、といふ先生の声に一番に手を上げたさつだ。わたしも学芸会

には出たがいつも脇役。しかし、脇役も主役もなく元気に大きく口を開け楽しい劇であった。「私はまだ結婚していません」「安心して下さい、神様の子ですから」にはハラハラした。

〈喜孝〉

二〇一六年七月号

発行日 七月八日
発行所 東京都中野区中央2・50・3
電話 090 98228 4244
ファックス 03 3371 4623

印刷・製本・レイアウト

竹僊房

カット／松村美智子・ティリ エイマ

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年

郵便振替 00130655526(あを発行所)

乱丁・落丁お取替えます。